

テレビにおける「農業・農村」表象とその構築プロセス (4)

——NHK『明るい農村 (村の記録)』を事例として——

○滋賀県立大学 武田俊輔
静岡文化芸術大学 加藤裕治
東京大学 祐成保志
静岡文化芸術大学 船戸修一

1 目的

本報告では、NHKの農事番組『明るい農村 (村の記録)』の制作者側に情報を提供していた「農林漁業通信員 (以下、通信員)」の役割に注目し、その著作や聞き取り調査に基づいて、農村を代表して情報提供者となった通信員たちの番組への姿勢や、番組における農業・農村へのまなざしの (再) 構築への影響、また通信員制度が農村にもたらしたものは何かを明らかにする。

なお通信員とは当初NHKの農事番組の誕生を承け、アメリカの農事番組の通信員組織を模倣して 1952 年に「RFD (ラジオ・ファーマーズ・ディレクター) 通信員」が置かれたのに端を発し、NHK各局に 10 人程度配置され、全国で 600 人程度の情報ネットワークを形成していた。

2 方法

通信員は、ローカルな農業や農村の情報を収集してそれをレポートにまとめ、番組制作者に情報を提供していた。こうしたレポートは一部が著作物として出版されており、そこからディレクター側にもたらされていた情報の一端を知ることができる。こうした著作は少部数で私家版に近いアクセスが難しいが、入手できた秋田県・新潟県・山口県の通信員の著作を分析し、また元通信員への聞き取り調査を実施した。さらに通信員を選任し、情報提供を受ける側であったディレクターへの聞き取りからも、通信員制度の詳細を知ることができた。

3 結果

通信員は都道府県の農業改良普及員を中心に、他に農協職員や集落の区長等で構成された。通信員はNHKの農事番組担当ディレクターに月に 2 回～4 回、地元の農業や農村についてのレポートを送るほか、ディレクターからの折々の相談や具体的な要望に応じて情報や人脈を提供し、時には取材にも同行した。こうした日常的な関係性を基盤に番組は制作されたのである。

通信員の著作に収録されたレポートは農業の近代化・機械化、農村の行事・風物、民具や生活習慣等が中心である。しかしそればかりでなく戦後農村の厳しい状況についても、原稿以外の形でディレクターに知らせており、そうした番組も数多く作られている。しかしそれは普及員であった通信員にとって、自らが推進した農村の近代化の負の遺産を直視することでもあった。

4 結論

当初は何を書けばよいか分からず困った通信員たちは、ディレクターからの指導を経て、どのようにメディアに向けて伝えるべきか知ること、農村を書き手としての立場から見る視点を獲得していく。普及員でもあった通信員にとっては、そうした視点は自らの普及現場での活動でも生かされた。さらに通信員としての番組の取材から生まれた地域の農家やグループとの関係性、また県内の通信員会議や全国会議からのネットワークも生まれていった。

文献 船戸修一・武田俊輔・祐成保志・矢野晋吾・市田知子・山泰幸, 2012, 「テレビの中の農業・農村 -NHK『明るい農村 (村の記録)』を事例として-」『村落社会研究ジャーナル』 37, p. 37-47.